

「語り続けたい原爆の悲惨さ」

高橋久子

昭和20年8月6日8時15分、1個の原子爆弾の閃光と轟音により、私の広島は一瞬にして、焼野原となり14万人の市民が殺されました。皮膚は焼き尽くされ内臓までも熱障害を受け、水を求める余り川に入って流され、防火水槽に入り死亡した多くの人々。地獄を見るような被爆者たちです。当日広島市には42万人の人が住んでいました。その日、広島県立第二高等女学校1年生の私は、学友100人と広島駅裏にある陸軍東練兵場で勤労報告隊員として、サツマイモ畑(軍用食糧)の草取り作業に動員されていました。8時15分後方より黄橙色の光線がシュウーと轟音をたてて通り抜けた瞬間、どの位時間がたったのでしょうか。私は気を失い周りが生温かくなり、薄暗い灰色になっていました。皆の泣き叫ぶ声で私は目が覚めました。前にいらした先生は顔が大きく真っ赤に腫れ、目がその奥でキラキラ光っていました。「作業は終わり、立てる人は立ちなさい」と言われました。我が身をよく見ると、両手首は焼けただけ、手の皮がぶら下がり、モンペも赤茶色に焼けています。周りを

見れば、手探りで先生や学友を呼ぶ姿があります。先生は^{きじょう}気丈にも「現地解散」の指示を出されました。私の体は痛み、時が経つにつれ^{ひざ}膝には1リットルほどの水が^た溜まり、歩くとドボドボ音がしました。手の指にも^{すいほう}水疱ができ、次第に^は腫れあがり、丸いボールの様になりました。しばらくして黒い雨が降りました。

折から^{くうしゅう}空襲警報となり白い体操服は目立つので、山の^{しげ}茂みに入るように指示されましたが、やけただれた手足に^{ささ}笹の葉が当たって痛く、小川に^か架かる土橋の下にかが^こみ込みました。「水は飲まないで。眠ってはだめ」との先生の^{さけ}叫び声が聞こえましたが^{がまん}我慢できず水を飲みました。そのまま警報が解除になるまで^{かが}屈んでいました。ふと周りを見ると数人の学友も^{かが}屈み始めていました。

家に帰らねばと思い体を起こし、歩き出しました。傷ついて^{みちばた}道端に横たわっている人を横目に見ながら足を引きずり、ようやく夕方になって牛田の自宅にたどり着きました。家は焼かれていましたが^{ひたい}額に^{けが}怪我をした母に^{むか}迎えられ、^{うで}腕の中に^{かが}転がり込みました。母がモンペの^{こし}腰のゴムを^こ歯で切って^{なみだ}焼け焦げた布を、^{はら}涙を流しながら^{ひたい}払いのけてくれました。

その日は太田川浴いで野宿、川向うの市街地の中心部では、一晚

中パチパチと建物や樹木が燃え、夜空に赤い太陽が沈まないように薄明るく生温かい夜でした。

翌日、戸板に乘せられて戸坂(へさか)駅より芸備線三次駅に下車、母の実家に運ばれました。ぐったりしている私を見て誰もが死ぬと思ったそうです。実家は旅館業で当時、傷痍軍人の宿となっており、軍医が回ってこられた時、初めてぶら下がった皮膚や、水疱の手当てを受けました。真夏です。ハエがたかればウジが湧く、一日中蚊帳の中で、布団の上に油紙を敷き両手を枕で支え、皿で膿汁を受けていました。

治療の合間、「こんな体にして可哀想に、ごめんね、許してね」と母が涙しました。「これは戦争のせいでお母さんのせいではない、非情残酷な原爆だよ」幾度か母の温かい手を握りました。夢多い青春時代ピンク色に引きつったケロイドにどれほど涙した事か、わかりません。「生まれたばかりのヒヨコの様に弱々しく今にも崩れそうだ」と後日、三次高校の学友の話です。その後も脱毛や貧血、紫斑点などに悩み体に入り込んだ放射線は白血病を始め様々な後遺障害を引き起こし、被爆者に不安と苦しみを与えてきました。適切な医療対策が始まったのは、被爆後12年たった1957年からですが、社

会的誤解に基づく差別を受ける中で病と生活に苦しみました。今でも暑い夏を^{ながそで}長袖、^{しちぶそで}七分袖で過ごします。ある集会で、出身地が広島だと申しますと「原子^{ばくだん}爆弾が落ちた時は大変だったでしょう、もう60年余経つと忘れているでしょうね」と言われました。毎朝^き着替^がえの度に、^{きずあと}傷跡を^{なが}眺め、一生これと付き合わなくてはと思っているのに、知らない人には仕方ありません。この宿命に負けずなお笑顔で前向きに生きています。10年前までは、体験を話していませんでしたが、今は積極的に^{ひばく}被爆体験を話しています。戦後日本は70年にわたって平和を^{きょうじゆ}享受してきました。^{げんぱく}原爆や戦争に目を背けることなくあくまで話し合いで接し、しっかり真実を見つめてください。証言書が^つ読み継^つがれ、語り継^つがれて^{かく}核兵器^{はいぜつ}廃絶と、世界の^{こうきゆう}恒久平和の大切さを次の世に伝えていかれることを念じます。目を閉じると8月6日の光景と紙屋町で亡くなった父の面影が^{せんめい}鮮明^うに浮かびます。